



色草子約分卷一

下



芭蕉翁發句集下

秋

初秋や海を志す田の一みとる
まの妹や事々如く秋の夜半の
文月や六日夕暮乃夜半の
意の海や佐渡子掛く小太の川
合歌の本は系るもの人星乃歌

素直の女七千余り七日夜秋七月
七日夜の素直の七千余り七日夜秋七月
七株乃花のよ本や星也秋
八月七日の夜風や素直の七千余り
銀河の星をひいて高懸も格を
たぐり一糸振をたぐり二星も格
をひいて素直の七千余り七日夜
る。此の星も格をたぐり七日夜
七夕や秋をひいて素直の七千余り

如素乃團をひいて

熊坂の女七千余り七日夜秋七月

本ら塚の素直の七千余り

魂のけりたるも焼場の素直の七千余り

尾の素直の七千余り

救もぬかしの思ひも素直の七千余り

素直の七千余り

素直の七千余り

素直の七千余り

か同る馬の毛の鬃鬣のまのの毛
被をたかへへ能くはなぬ
あまのひまひ抄るのまの
乃まのあまのひまひ抄るのまの
まのあまのひまひ抄るのまの
まのあまのひまひ抄るのまの
まのあまのひまひ抄るのまの

稲妻あや顔のふっすまの穂
二見乃浦みく

祝うひ後あやのほた石を
あまのひまひ抄るのまの
あまのひまひ抄るのまの

畫讀

西行のまのひまひ抄るのまの
あまのひまひ抄るのまの
あまのひまひ抄るのまの
あまのひまひ抄るのまの
あまのひまひ抄るのまの

開きぬらむとて海へもどす
みかみかみか

空方一と種はまゝとてぬらふらふり
牛部屋に牧のまゝとて種はまゝ
ひか〜とて種はまゝとてぬらふらふり

あゝとて種はまゝとてぬらふらふり
秋す〜とて種はまゝとてぬらふらふり
全昌ちにとて種はまゝとてぬらふらふり
よとて種はまゝとてぬらふらふり

追まらぬや〜庭の柳はまゝとてぬらふらふり
とて種はまゝとてぬらふらふり

和角蓼蟹旬

上落〜とて種はまゝとてぬらふらふり
も麻ちの信て〜とて種はまゝとてぬらふらふり
几中〜とて種はまゝとてぬらふらふり
〜とて種はまゝとてぬらふらふり
佛羅よひ〜とて種はまゝとてぬらふらふり
〜とて種はまゝとてぬらふらふり

信わさふ不ひく死かつふは乃松
嵐雪の画に漢をまをるれと

形影をて下るは事なく
揺ららるる人々廓おもひ
こきまといふあきさふ

胡白を酒のうらぬはうら
困閑の候なり

物うらやまをく損ちるは門乃垣
暮あやまは生まこわの友かたうす

郭影のをうり啼ゆぬのよまう
暮あやま一夜をやせ山乃大
松引まをるは一回のうま
あまう二人のうらまの年老
男れあうも変て物候をいふは越
後の玉影のうらまの遊女あはれ
あうまをては再まう男れ
まをる

一家り遊女もねるり暮れと月

小松のふりかへ

志留のたふや小松のうらなすき

鉄水きり雨の中

ぬきくり人もおろやるの秋

畫像

白露もあはさぬ秋のうらなすき

養老のまはるにゆき

さるる

秋色やーとらに種ー庭の秋

深井のや小貝にすーふ萩のうら

萩の種や路をつつとむき生

深井店

田舎のうらに鹽に雨はまておろ

こたもきこへーとらにやぶ

西郷

勢崎のやぶに苦き葉やうら

さるるくとらにやぶ

玉川のふりかへ

い〜い〜い〜女阿のう〜い〜世渡り
よ〜い〜い〜白き結ゆい〜い〜

花乃もや蝶のつ〜い〜い〜蓮の秋
あ〜い〜い〜

門ノ入ハ穂鉄主業の白ひの那
本芳家のあ〜い〜い〜あ〜い〜あ〜い〜

い〜い〜い〜い〜

あ〜い〜い〜い〜あ〜い〜い〜あ〜い〜
ま〜い〜い〜い〜あ〜い〜い〜あ〜い〜

夕影や秋の色〜秋歌の那

眼前

道のつれ木撞と馬〜い〜い〜い〜
花むくもあ〜い〜い〜い〜あ〜い〜

い〜い〜い〜い〜い〜い〜

薬園〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜
子指のあ〜い〜い〜い〜い〜い〜
あ〜い〜い〜い〜い〜い〜い〜

と云はるは後集に於て

月清し遊むのりては砂乃く人

種々殊異なり

月いつと種々志のめる海乃底

戸をひききら西の山あり伊勢と云

花ももよほにちまももよほす

夢のまふ月ももれまふ一浮山

又まふ妻のりもあやうにんくた

は日向守の妻おぼせりて席をひき

らけりまふも今まふも

月さひよめちの妻乃けりしきん

妹のまゆゆもまふも月をひき

正秀亭初會

月代や孫もはれはるるは

遺のく月さく入よはは所堂

はあな店とまふいやと名をまふ

まふのた物もまふはあな

はまはるるをひき西のよまをひき

よふらぬら信長もよふらぬらその信長
かみつらぬら

紫雲の月やまはるるつらつ坊
るるつらつ坊

梧桐のつらつ月のつらつ坊

月夜はまはるるつらつ坊

ききききつらつ坊

源川のつらつ坊

川よつらつ川下や月乃友

東嶺を人々つらつ坊
つらつ坊

入月のつらつ坊のつらつ坊

月下につらつ坊

月夜もつらつ坊

つらつ坊

月夜もつらつ坊

武蔵守つらつ坊
つらつ坊

名目は花とてかゝるに餘りも
多し中 徳慶の書や田舎の書
多しとてかゝるに異なすも
之中 ちの門とてかゝるに
多しとてかゝるに友とてかゝるに
多しとてかゝるに 藤原の月も十
本を伐とてかゝるに 月乃
十の書とてかゝるに 文料の郡
やきとてかゝるに 月乃

望田書

望田書は海を著る 程乃 書
の 望田書は海を著る 程乃 書
の 望田書は海を著る 程乃 書

望田書

二十の月乃 子に松を抱く
草の書や 月乃 里の屋
西行の谷に 鹿子流あつた
女たの草

草は女西行の書

舟葉新らふををぬく

粟小穂子中心くもつむき叶の香

知是才人集の秋毫を如く

と多たや雀と後とぬ少くたの葉

事う未恋や秋穂の萩のさ遠く

新くや石の才の阿 杉赤く

困人戸牧事を心ゆく

苔の穂く舟 又中法あくく

棧や命をかむ 苔くはく

遊女畫價

枝ぬりは日ゆくかま新葉葉の

旁面乃やをを葉葉れくをく

何くあく小家と秋の柳く

秋海棠西風のくは 笑みく

鬼灯くはもをすくくもおき

道母くはく成坊母くはく

磁赤く我子園くは坊く

猿引く猿の小神をまぬく

小枝を遠くまで年別よき

物事よく扇引はく余波う那
相のたまふ勢緯なる塚の肉
奪結目乃今やとぬめと帰部

逢田よそ

痛をなすおまゝに落く旅路を
稽す免業の末畑や 迹交
刈迄や子福くくの町の
さ乃名はまよりして四半産

下十五

根の寒らる挿きの相もや相あ
たよかふやあまきり乃日く
ひいと帯あうあう一秋の麻
接やまのあひひ出子駒むら

言の後の後火とくふむをこく

無火より何麻やほの下むさひ
松意ともなほく聖かこの那
吹とまひ石を海弓結野分

以上の破をとおし程風のあうとく

彦右左衛門 人の程をいふ中
こゝ長を記事さる

よのいへも唇をきく 秋忠風

去来つ許りう 伊勢の記りさる
くも我の妻より 幸かた

西東あそひさ 同一 何れ此風

嵐蘭を悼

秋風平 おく 幾一 紅葉の枝
入麩の下 焼 立ち ありきく 秋

旅窓長夜

九夜 起くも 月形七ツウ

車庸亭二句

秋の夜をくち 爾いさ 鳴り 那
おもくも 秋の 秋の 秋の 秋の
大和の 玉井の 由り

菊花の燈

秋を 輝く 燈の 光の 菊の 花の
秋を 輝く 燈の 光の 菊の 花の

多雨乃雨

起よる葉はのこぬり水の跡
もく咲けたりまじりたふのふ
まじりぬのまじりぬのまじりぬの
純山の宮をこもるまじりぬの
あまの心をすまじりぬのまじりぬの
とぬるまじりぬのまじりぬの
らんぬのまじりぬの

らんぬのまじりぬのまじりぬの

山中温泉

山中温泉
本因亭

かゝるまじりぬのまじりぬの
舞のまじりぬのまじりぬの
九月のまじりぬのまじりぬの
まじりぬのまじりぬの
まじりぬのまじりぬの
田舎のまじりぬの

指とまの堵もめてこし一筆はげま

大門通をさうり

琴の巻や古物店乃の寄る人の菊

行末本流の良の言うはくはく

世々の良業花の舞やとまのり

蝶をさすく酢をさすく菊の鱈か

伏山水さうり

新巻もや菊の巻はすく豆腐く

八町始まて

おとけは必笑や石屋の石巻の同

危懸うも男乃心なつる山巻

乃起りさうり

一露もこりぬる菊巻氷の那

菊の香や産つるもさつる復の志

美々の良業花の舞やとまのり

菊乃香や古物店乃の寄る人の菊

園作

美々の良業花の舞やとまのり

山崎のふりかへりて

菊のあはれきよ良の程波もちる月夜

園女の家也

白菊は自ら中々くくくくくくく

後醍醐帝の遠征を

清原直を狩りて志のやうな事を

本意を操りて世乃人

怨山別墅

義居るくすの良子のと拾へ

秋風の吹くくくくくくくく

可憐亭

祖父と親おのりて庭の樹を

山崎の家也

里あつてく拵乃よもぬ家也

志ぬ柿や一口はくらふ積乃

菊乃露落るく拾へハぬく

草くくくあふつり子タ

松草やうき程を松乃形

まのさかやかしらむねの露
松茸やーぬ木北葉のへそく付
伊勢北山遊とよまきと
若草まき高へ花てのりけり山依
中秋の月まきと神の里嬉捨出り
まのちめひて松まきと神同申と
かねてけり長月十三夜まきの
木まきと神とまきとけり後まきの
佐吉の市まきと

外買くかふかたる月えり那
秋もやましくく面も月乃形
内まきとまきとまきとまきのま
ぬまきと
まのち不皆押合ぬ清遷官
兄のまきとまきとまきの白まきと
まのちまきとまきの相はる眉とや
老まきとまきとまきのま
まのちまきとまきのまきとまきのま

秋風や相中くく心て苦み秋夜
見よとせと御事たるくねとほつたの秋
悔やとせと入りて空をみよと古
心

送る事何送らうと果はまらるの秋

種の廣き遊ふ

はらやとや次子よからくは渡り秋

小倉本は相実無事

秋も流しりややす事よ小松川

秋懐

此秋も何と逢ふよと云くく
娘ゆつと涙を何とす人そ

憶老杜

風聲を吹てさき秋歌すもと誰子そ

去る飛鳥を出し時聖さくく秋

心よ思ひく秋さくく心

死もさぬ秋葉のさくくよ秋思とれ

枯枝よかきとれとさくく乃葉

冬

相番のめいけいけいけいけいけい
舞くまんとくまんとく

此海より子種を拾んまゝ一ふれ
よまよるくく大も一くまよおのまう
江戸をまきおとせ

猪人とりわの各名をえん初討る

一尾根のくくくくくくくくくく
山株へ井も新から新なるはあか
知しおれ猪も山裏をほけい
つくまらまらまらまらまらまら

草名

人くをくくくくくくくくくく
けあや田のあま株のあまむあま
河田の野塚平らあまあま
宿つて名をまのくくくく種れふ

るうこも志うう一町ぬ乃大井河
くあもろる人もほよきもろ種垂
新葉の出そもろそ早き一とれ哉
貞徳 宗并 矩 介 乃 乃 乃 乃
休る本誌 遊をいふあは志をいふ子
人の旁へうめておこ
初しられ初乃字をわの町白う給
一しと進 砥や 障とく小石川
みと進や月もいふもろ 虫乃吟

冬あひりもまこよる帰ん 世ううら
金屏の松紙古ひやみこまき子
贈 酒童 湯水の紙を這せたる田標
昔るの 柳紙 へらまきとねよ牛
母も馬もまき踏こいふたかい
難波津や田標のぬいさるまありり
志うこも志うこも志うこも志うこも
先祝へ梅をこらう乃ぬも 隠

千川亭

朽く子何吹をんくや多を就
為まのりくあまの神の成る事
事月のみを流川の香をたぐり
起出さゆ神念諸森の日数や
清新傳や沖のやう酒を升
菊鶴匠きり畫一多う清新講
蛸子海酢賣り袴着をいふ
婦り童女の石を衣ぬりふく守講
上梁耳口切り日

口切り堀の庭をたぐり
炉心もまきやた友老母く松葉に雲
本くく結方を牛さ由子似らるる如

牛畫續

あう〜も竹も〜も志しまうぬ
風や類もね〜も人志新
本穀風子出吹〜も松葉水

同新誠甚品極也

涼くあましく世をばやむ信若
ゆる及持理をいひまは

まへよわのそをいぢる世の無事川
之尺乃山もあはれ本のもある

平田剛照の本とあつた時
そいひまはる 二句

百年たふ京をを過乃の流もあはれ
さよわゆる洞やそあはれちるおき

道園居士のま名まきくゆ久一ま

まにまにふんゆを契つて終り
世のむさしむ初を二巻の中
たぬぬやまや一巻のうにあら
とひひひひひひひ

そ乃いひらひら枯木此枝の長
数回み訪つ社頭大子や事蹟地
ちもあましくそむらひく子

志のあま枯く解ふやうふ
そあの後時をいひま

花のれ枯るゝ表をこゝろとあはれ
之れをゆきてる事小梅の八重友
月日くは来うていふく回ひ入
結糸

心もくもさくやまは枯屋花

十月八日梅中吟

後年病くさる枯れをかけめら
刈れやあまの心あめさる麦のさ

吳漢耕と別聖

本よりーに白ひやつちりーゆり花
さる事や粉糠のかけふ白のさ

熟田梅人亭芝草の困を思ひよきて

水仙や白き清子乃やもつり

之の白きさふりの子二人は
拙先拙後と名を対あそく

梅の白ひ梅より白しーの仙花
菊乃後大根結糸はくは船
鞍坪母小坊主乃くや大根引

去序子稔者まき葉根を喫し

武士乃ち根少のまき 嘯う那

冬の手折破子今新まき 山さうか

防川亭

多枝探し梅子あふらる 新焼子

梅椿子笑かめん 保美の里

おろりく必入探まきうらら様

芥焼やすう痛乃田井のまき氷

社園うをを尋く 二句

まきさうくくよらうくまきあふらる
はまきさうくくあまきさうくまきあふらる
か貝山の公金無相うー時くまきさうく

病中

まきのむさうくくまきのむさうく

まきのむさうくくまきのむさうく

深川大橋成流り時

まきのむさうくくまきのむさうく

まきのむさうくくまきのむさうく

成の子にもあやふく移る見え
初雪やさしむの度へ一羽ある

山中の子をたて遊ひて

まの雪に危の皮乃 替作

南部まゝ

初雪やりの大佛乃まゝらま

挽り

まの越まの雪少信此後忠色

初雪や朴かゝるまゝに 移るうへ

まの雪や水虫の毒葉のまゝにまて
おき者まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

ま見入子あつて

市人の子は是ころ人雪のま

旅人まゝ

馬まゝ人旅まゝまゝまゝまゝまゝ

まねまゝ人まゝまゝまゝまゝまゝ

中へ一人のまゝまゝまゝまゝ

まひつるま

昔も昔人今も昔師走は名月夜
深川ハも貞女也

羊頭くちしき乃侍也投乃中
對友人書之良

君火くけとまき物ぐきんき丸を
閑居の歳 小筆の

酒乃めとくく様もきねおのき
吟海の歌本陣業言まはに伝
くふ形も井雅章の君都とを

とてと地てはくはに終りくくもて

系まきくくまてくもやもまはも
熱田の文御後居るめ

麻衣をきと鏡も信一もまはも
去年の日記も様とおもひゆも
越人よ様も

二人ハ一もまきもあもも海も
雪もらも梅屋の落もかまは
いささらは雪もんもももも

をのり喜ぶは誰人とあん井のまゝ
 きて昔の後の志がえの里に
 と形ついま久津松をあらう
 今若き尼の許子に給てか
 かり出さうつわくおり
 かねの尼乃と解一や志がえ
 遊水離室
 比呂三よききつて
 つのり中むる島を
 下 廿二

小町画讃

米さや雪うめ
 雲さや梁も
 舟乃渡
 山画讃
 雲さや雪さ
 舟乃渡

自画自讃

いづれもいづれもやちあ乃り捨れはま

膳所の草子居を今く訪ひては

雲あせよ細代の歩魚若くは人
雑炊下り堅忍まなく其のあはれ
おとろしきまやがらんまは西
雁さかくも月林田曲やまきうる
かゝ魅念や也乃瘦もまきの中
月花のつとよ針とらん寒乃入
樽あはれをまき腸あはるおき個

茅舎買水

少苦く偃嵐の咽をうるほをきき
すくもりやる上り氷る新は海
瓶破くおれ少かる操るえい
こも禁くも拭あふるこまらぬ

越人とい吉田の記

まらぬと二人格をまきおのま
仙化う父乃退言

袖のまよらぬまきし情はつ

塩麩の歯くさつとまき——魚の棚
葱白くはらふとまきさう那
小よれく——帆柱さむたん入江
屋敷寺にまきさく
後と云一ツ新らむとまきさく
まうくはらふとまきさく火燧小
位つとめ旅たさうやとまき巨燧
ぬまき世に——のさく
おおのほらとまきさく火桶うさ

二二四

少年漢——さく人な
埋ちとまきさく洞のまき——さ
曲琴拵さく
うらとまきさくまきさく新法所
まき丸の後
おとら名やまきさくおの丸さ中
まきさくまきさくまきさくまきさく
はらとまきさく鴨のまきさくのまき白
毛さくまきさくめく——鴨のまき

子持の深きうらみてくさしき草花

あきのあき日

星崎の園をりかたも草花らへ
雲は夜も葉もさかたしきあき
を牡丹らへりかたもさかたしき
伊の古傳らも海乃さかたしき
乃もあきくはるもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき

鷹一ツ刀付くくさしき
生花一ツあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき

藝田

遊のまめ純物くくさしき
あきもさかたしきあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき
あきもさかたしきあきもさかたしき

節事作を雀のこころふゆきうま
くれくく解を木魂の徳傳れ
るぬも二千日に通し餅乃喜
煉掃やうりゆりさのさる新
語を復れんやうな母乳掃拂
行脚の五雲一具新波子ゆり通
くもこも経て路通をうりゆき
くれや世乃煉掃やうぬ古合子

旅行

煉掃やう移の本乃宮の嵐の那
すくもきこま己の棚つう大工外
月白を脚走を子路を掃をな
何る女歩を北市子ゆりゆり
かろきまゆ脚を北海のふつう
自北市路を費にゆきやね
るれ忘るうりゆき乃定やうん

洛師雲別當景樞九興行

中りゆり移を友ゆやゆりわを種

乙あり新まきまをまら

人よあを置かすいふまき年より

魚身おひらきしりわすま

下山いれしきききききききき

江戸よあま早まき飯も持ん年の暮

旅を帰るのころに

ゆきりおめをまきしりわすま

とてくま世をくまひはすこふ

とてくま世をくまひはすこふ

ゆきりおめをまきしりわすま

とてくま世をくまひはすこふ

ゆきりおめをまきしりわすま

とてくま世をくまひはすこふ

ゆきりおめをまきしりわすま

とてくま世をくまひはすこふ

雑

夕陽の舟の健筆をよんで

世の中もさうなれば我のやうな家

と季人回

月花の古まじや涙能あるしき

昔をさうするまゝを杖裏返りし

すふを頼りちかうするまゝのあ

よりのなると杖つき坂を流るるも

船よるよ誰まの晴そ行かぬ

くまの湯後よめは枝の形

酒のこゝろは乃経

月花もさうく酒のむらりぬ

或は形得ま

海をぬるるやそくまき身者

布袋の強横

物かーや袋の中乃月と毒

俳諧書籍目録

諧仙堂藏板

俳諧七部集

甚の目 多野日 望とて 懐と乃 淡猿と乃
岸依 何と野 小巻本七冊

同小刻

文化再板校正

二冊

同續七部集

深川集 卯辰集 負やと死 紙並や戸
者候海 小文彦 千尋掛 小本二冊

同乞尔波抄

北邊大人に授 者国識 全巻六冊
七部集の白く乃手小はと紙紙しそ子小波
の義ととくしと紙と

おく岩の細尾新奥形記形一冊
去来本

續 五編 支考選 一冊
首の松魚 全 一冊

其角七部集

二冊

枯尾花

新選集 二冊

華實年浪州 十五冊

及小文 一冊

教歌教句集 延選五冊

新百負 一冊

伊陽如菫、并保竹之堂著
芭蕉公紀古傳 有國校 延選 五冊

甘藷村七郎集 二冊

合類大節用集 文字上あり和漢の 十三冊

寛政元酉七月再刻

諧仙堂藏板

皇都書舖

野田治兵衛
浦井徳右衛門
筒井庄兵衛

